

看護学生の看護婦イメージに関する研究

——理想と現実の学年別比較——

曾根原純子, 小林千世

Study on nursing student's image of nurse.

——With comparison among classes in nursing students.——

This study has a dual purpose. One is to investigate idealistic and realistic images of nursing held by nursing students of this university. The other is to analyze various factors influencing both images.

1. The ideal image consists mainly of 5 factors —— f1 (humane), f2 (how worthwhile the work is), f3 (circumstances at work), f4 (attitude toward the speciality), f5 (essence). The real image consists mainly of 5 factors —— f1 (attitude toward the speciality), f2 (humane) f3 (how worthwhile the work is), f4 (circumstances at work), f5 (essence).

2. Third grade students tend to have a positive view of idealistic images especially of the speciality itself and the circumstances surrounding it. However, they tend to have a negative view of realistic images—the worthwhileness of the work.

3. Various factors influence the ideal view —— circumstances at work and the specialty itself. These factors also influence the realistic view —— worthwhileness of the work. These factors are influenced by the overall background of the various students.

Key Words :

image of nurse (看護婦イメージ), ideal image of nurse (理想の看護婦イメージ), real image of nurse (現実の看護婦イメージ), nursing students (看護学生), factor analysis (因子分析)

はじめに

イメージは、「具体的実証的な知識によるよりも直観的感情的な印象によって各個人に形

成される考え、態度、概念などを意味するものである」¹⁾が、ポウルディングは、「人間の行動はイメージに依存しており、イメージが変わればそれに応じた行動をするようにな

る²⁾と述べている。このようにイメージは、各個人によって異なること、漠然としたものでありながら各個人の行動に影響を及ぼすこと、情報によって変化する可能性があることなどが考えられる。

看護教育において、それぞれの学生の能力を最大限に引き出し、望ましい行動の変容を実現させていくためには、まず、対象者である学生が看護についてどのようなイメージを持っているかを把握し理解することが必要である。特に専攻がそのまま将来の職業に結びつくことが多い看護短大生の場合、学生が「看護という職業」をどのように受けとめて入学し、専門教育を受けるプロセスの中でどのように変化していくのかを知ることは、教育内容や指導方法の改善、学生個々の進路選択やキャリア発達の支援、看護婦の人材確保などのために重要な課題であると思われる。

看護学生を対象にした看護婦イメージに関する研究は数多くなされており、これまでの主な結果をまとめてみると、①看護学生は看護婦を重要でやりがいはあるが、重労働で窮屈な職業とみている³⁾、②学習の進度によって理想的・観念的イメージから現実的・具体的なイメージに変化している⁴⁾、③教育課程別では、短大生のみを対象にした調査の場合は概ね好意的イメージをもっていると報告されているが⁵⁾、大学生、短大生、専修学校生の比較では大学生、専修学校生の方が短大生に比較して肯定的・好意的イメージをもっている^{6~8)}、④看護婦志望、入学動機が明確な学生の方がより肯定的イメージである^{9,10)}などが共通して報告されている。しかし、同一対象の看護学生が専門教育を受けていくプロセスでどのように理想と現実の看護婦イメージを変化させているのかという縦断的研究はほとんどなく、またどのような要因によって看護

婦イメージが影響されているのかを明らかにしている研究は少ないといえる。

そこで、本研究では看護婦イメージの縦断的研究の最初の取り組みとして、まず本学看護短大生を対象に質問紙調査を行い、理想と現実の看護婦イメージとその要因について学年別に比較検討したので報告する。

研究方法

1. 調査対象

本学看護学科に在籍する女子学生187名(1年次生61名、2年次生68名、3年次生58名)

各学年の臨床実習進行状況は、1年次生は全く実習体験はなく、2年次生は半日実習と1日実習を1回ずつ1年次に実施している。3年次生は1週間の基礎看護学実習を2年次の最後と3年次に進級直後に実施しており、各論実習に取り組んでいる。

2. 調査項目

看護婦イメージ：イメージ測定に広く用いられているSD法(semantic differential technique)を採用した。意味尺度の構成は、真鍋¹¹⁾、長田¹²⁾の形容詞尺度を参考に、理想と現実の看護婦イメージを共通に測定しようと思われる36対の両極性の形容詞を選択し、7段階評定(どちらでもないを中心に、両極にその距離が隔たるほどやや、かなり、非常に)の用語を明示した。また、評価・活動性・力量性を意味するこれらの形容詞対の評定の偏りを少なくするために、形容詞対をランダムに並べかえ、同時に肯定的あるいは否定的な形容詞がまとまらないように配置した質問紙を作成した。

学生の背景：看護婦イメージに影響を与える要因として、入学動機、現在・将来の看護婦志向、両親の職業、現在の生活形態、入院経験・死別体験・1日看護婦体験の有無、講

義・実習の感想、就労継続期間などの項目について制限応答式の質問紙を作成した。また、看護婦イメージは自分らしさの identity の確立と深くかかわっていると考えられたため、菅¹³⁾作成の自尊感情尺度(10項目)を質問紙に加えた。

3. 調査方法

1995年5月8日に調査に協力の得られた学生に質問紙調査を実施した。質問紙は、各学年ごとに直接配布し、直接回収した。

教示は、「質問紙に沿って順次回答してください。」SD法については「次のページに形容詞対が並んでいます。理想とする看護婦のイメージと現在働いている看護婦のイメージについて、あなたが日頃どのように感じているのか質問紙に例示してあるように○をつけてください。深く考えないでできるだけ直感でつけてください。順番にもれがないように、また1つの形容詞対について2つ○をしないようにしてください。」とし、質問紙にも同様のことを明記した。

4. 分析方法

①学生の背景に関する単純集計。自尊感情については合計得点(以下SE得点)を算出した。

②36形容詞対を肯定的イメージから否定的イメージにいくに従って7～1点に得点化し、理想と現実の看護婦イメージのそれぞれの形容詞対について学年ごとに平均値によるプロフィールを作成し傾向分析した。

③理想と現実の看護婦イメージごとに36形容詞対について因子分析を行った。因子分析では、主因子解を抽出し、バリマックス法による直交回転を行い、要因と各因子得点について一元配置分散分析による対比較を行った。ただし、全群中で複数の任意の群をまとめたグループ間の対比較では Scheffe の方法

を用いた。また、SE得点と因子得点についてはピアソンの積率相関係数を算出し、これらを合わせて看護婦イメージの構造について比較検討した。なお、SD法ではコンセプト(概念：本研究では理想の看護婦イメージと現実の看護婦イメージ)が複数あり、それらを込みにして因子分析を行うのが一般的であった。しかし、概念のもつ意味空間の普遍性については、SD法を開発した Osgood¹⁴⁾も、判断の対象が変われば尺度の因子的意味が変わり、抽出された因子の相対的重要性の順位も変わるという事実を指摘しているため、本研究では過去の因子分析の結果に依存して尺度の因子的意味を予測するのではなく、各概念ごとに因子分析を行い各尺度の因子的意味を検討することにした。

結果

1. 学生の背景について

学年別に集計した結果を表1に示した。なお、各調査項目の集計数と各学年の学生数が一致しないのは無回答による欠損値のためである。学生の背景に関する項目中、 χ^2 検定で学年間で有意差がみられたのは、「両親の職業」($P < 0.05$)「生活形態」($P < 0.01$)「就労継続期間」($P < 0.05$)の3項目であった。また、SE得点では、t検定を行ったが、有意差はみられなかった。

(1)入学動機及び将来の看護婦志向

2年次生の入学動機で看護婦志望がやや半数を超えていたが、入学動機・現在および将来の看護婦志向は、全ての学年で半数をかなり下回り低い傾向がみられた。また、1・3年次生は入学動機から将来の志望まで大きな変動がみられないが、2年次生は入学動機の看護婦数に比し、現在および将来の看護婦志向が半数以下に減少していた。

就職後の継続期間では、各学年でできる限り継続する学生が多くみられるものの、学年が進行するにつれて減少し、それと共に2・3年次生では、出産までとする学生が増加していた。現在の時点で看護婦を志向する学生

の就職後の継続期間を学年別にみたところ、できるだけ継続する学生は全体と同様の傾向を示していた。(1年次生17名で81.0%, 2年次生10名で62.5%, 3年次生10名で58.8%)。

表1 学生の背景の単純集計

背景		1年 N = 61		2年 N = 68		3年 N = 58	
		実数	(%)	実数	(%)	実数	(%)
入学動機	看護婦	22	(36.1)	37	(54.4)	23	(39.7)
	助産婦	14	(23.0)	14	(20.6)	17	(29.3)
	保健婦	7	(11.5)	4	(5.9)	3	(5.2)
	養護教諭	6	(9.8)	4	(5.9)	7	(12.1)
	その他	12	(19.7)	9	(13.2)	8	(13.8)
現在の志向	看護婦	21	(34.4)	15	(22.1)	17	(29.3)
	助産婦	10	(16.4)	19	(27.9)	18	(31.0)
	保健婦	7	(11.5)	13	(19.1)	4	(6.9)
	養護教諭	4	(6.6)	6	(8.8)	3	(5.2)
	その他	19	(31.1)	15	(22.1)	16	(27.6)
将来の希望	看護婦	24	(39.3)	16	(23.5)	18	(31.6)
	助産婦	10	(16.4)	20	(29.4)	19	(33.3)
	保健婦	7	(11.5)	10	(14.7)	5	(8.8)
	養護教諭	5	(8.2)	7	(10.3)	3	(5.3)
	その他	15	(24.6)	15	(22.1)	12	(21.1)
両親の職業	保健医療関係	29	(47.5)	25	(37.3)	15	(25.9)
	それ以外	32	(52.5)	42	(62.7)	43	(74.1)
生活形態	一人暮らし	40	(66.7)	58	(85.3)	43	(75.4)
	家族と同居	17	(28.3)	9	(13.2)	7	(12.3)
	その他	3	(5.0)	1	(1.5)	7	(12.3)
入院経験の有無	あり	41	(67.2)	55	(80.9)	45	(77.6)
	なし	20	(32.8)	13	(19.1)	13	(22.4)
死別体験の有無	あり	43	(70.5)	43	(63.2)	45	(78.9)
	なし	18	(29.5)	25	(36.8)	12	(21.1)
1日看護婦体験	あり	29	(48.3)	30	(46.2)	31	(53.4)
	なし	31	(51.7)	35	(53.8)	27	(46.6)
講義の感想	興味が深まった	34	(55.7)	36	(53.0)	27	(46.5)
	どちらでもない	25	(41.0)	28	(41.2)	26	(44.8)
	興味を失った	2	(3.3)	4	(5.8)	5	(8.6)
実習の感想	楽しかった			27	(42.2)	27	(48.2)
	どちらともいえない			16	(25.0)	9	(16.1)
	つらかった			21	(32.8)	20	(35.8)
実習への期待	期待している	38	(64.4)				
	どちらともいえない	3	(5.1)				
	不安である	18	(30.5)				
就労継続期間	結婚まで	5	(8.5)	4	(5.9)	6	(10.5)
	出産まで	5	(8.5)	16	(23.5)	17	(29.8)
	できる限り	49	(83.1)	48	(70.6)	34	(59.6)
SE平均得点		22.75 ± 4.82		23.11 ± 4.75		22.12 ± 4.62	

(2)生活背景及び種々の体験の有無

両親の職業が保健医療に関係のあるのは、1年次生が最も多く約半数を占め、学年の進行と共にその数は減っていった。

全ての学年で、現在の生活形態は一人暮らしが多く、学生自身や家族の入院経験、家族や親しい人の死別体験のある学生は半数以上を占めていた。また、1日看護婦体験の有無は各学年ともほぼ半々の傾向がみられた。

(3)講義および実習に対する感想

講義の感想では、各学年とも「興味が深まった」「どちらともいえない」がほぼ半数に分かれていた。

実習に対しては、実習経験のない1年次生では「期待している」と回答した学生が半数を超えていたが、「不安である」学生も全体の1/3みられた。また、基礎実習あるいは各論実習を経験した2・3年次生の感想では、「楽しかった」が「つらかった」を僅かに上回っていた。

(4)SE得点

各学年の平均得点は表1の最下部に示す通りで、学年間で差はみられなかった。

2. 概念(理想, 現実)毎の学年別プロフィールの比較

(1)理想の看護婦イメージのプロフィール

理想のプロフィール(図1)は、各学年とも中央に位置する「どちらでもない」4点を上回り、全ての形容詞対について肯定的にとらえていた。特に、1・2年次生では共通して「やりがいのある」「親切的」「親しみやすい」「重要な」「意欲的な」「価値のある」が6.5以上であった。3年次生では、36形容詞対のうち6.0以上の形容詞対は19であったが、6.5以上のものは皆無であった。

(2)現実の看護婦イメージのプロフィール

現実のプロフィールでは(図2)、全ての学

年で理想の形容詞対のプロフィールよりも低い傾向がみられた。「どちらでもない」4点より低いのは、「不自由な」で1年次 2.2, 2年次 2.4, 3年次 2.9であった。また、「苦しい」で、1・2年次生が4点を僅かに下回っていた。一方、6.0を超える形容詞対は、1年次生は「やりがいのある」「重要な」「価値のある」であったが、3年次生はなかった。

3. 因子分析で得られた看護婦イメージ

因子分析では、因子分析を3因子解から8因子解まで行い、各概念とも寄与率5.0以上の5因子を採用した。なお、現実の第5因子は

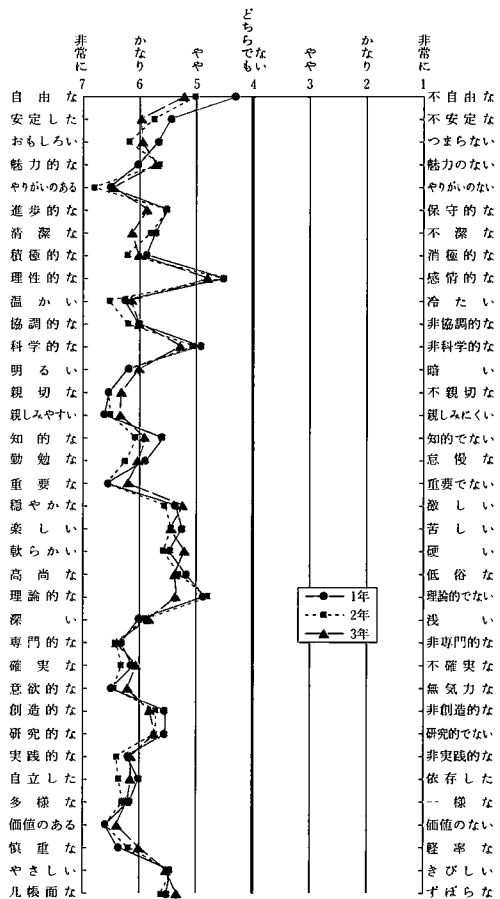


図1 理想の看護婦イメージのプロフィール(学年比較)

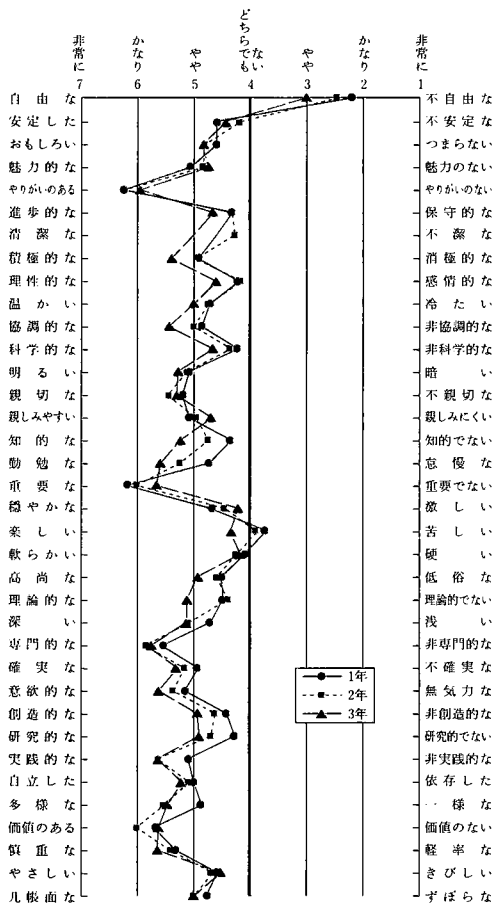


図2 現実の看護婦イメージのプロフィール (学年比較)

固有値、累積寄与率および因子内容の解釈に基づいて採用した。因子負荷量0.40(絶対値)以上の項目を抽出し各因子の解釈を行った。

(1)理想の看護婦イメージ

表2より、第1因子は「親しみやすい—親しみにくい」「軟らかい—硬い」「楽しい—苦しい」「明るい—暗い」など12項目からなる、外に現われる性格特性を示しており、『人間性』の因子と命名した。

第2因子は「意欲的な—無気力な」「実践的な—非実践的な」「多様な—一様な」など9項目からなり『やりがい』の因子と命名した。

第3因子は「安定した—不安定な」「おもしろい—つまらない」「進歩的な—保守的な」の5項目で、これらは看護婦の労働環境を示していると考えられたので、『就労状況』の因子と命名した。

第4因子は「科学的な—非科学的な」「理論的な—理論的でない」「研究的な—研究的でない」など6項目で因子負荷量が高く、看護婦の専門性と密接に関連しているため、『専門性』の因子と命名した。

第5因子は「高尚な—低俗な」「深い—浅い」「理論的な—理論的でない」で、看護のあるべき姿の奥深さを示していると思われ、『本質性』と命名した。なお、第5因子までの累積寄与率は46.1%であった。

また、表2より、理想の看護婦イメージとしては、f1『人間性』やf2『やりがい』については肯定的なイメージをもち、f3『就労状況』f4『専門性』f5『本質性』の因子では、負の項目で負荷量が高く、否定的なイメージであった。

(2)現実の看護婦イメージ

表3に示す通り、第1因子は「理論的な—理論的でない」「研究的な—研究的でない」「勤勉な—怠慢な」など11項目で因子負荷量が高く『専門性』の因子と命名した。

第2因子では「やさしい—きびしい」「温かい—冷たい」「穏やかな—激しい」など9項目であり、『人間性』の因子とした。

第3因子は「価値のある—価値のない」「重要な—重要なでない」「専門的な—非専門的な」の11項目からなり、『やりがい』の因子と命名した。

第4因子は「おもしろい—つまらない」「安定した—不安定な」「やりがいのある—やりがいのない」で『就労状況』の因子とした。

第5因子は「進歩的な—保守的な」「積極的

表2 因子分析 (理想)

変数名	f 1 人間性	f 2 やりがい	f 3 就労状況	f 4 専門性	f 5 本質性	h^2
親しみやすい-親みにくい	0.759	0.193	-0.074	0.116	0.047	0.634
軟らかい-硬い	0.700	0.069	0.064	-0.082	-0.151	0.528
楽しい-苦しい	0.694	0.027	-0.267	-0.214	-0.119	0.614
明るい-暗い	0.661	0.173	-0.200	-0.122	0.012	0.522
穏やかな-激しい	0.659	0.223	0.026	-0.028	-0.210	0.529
温かい-冷たい	0.657	0.341	-0.204	-0.001	0.094	0.598
親切的な-不親切的な	0.623	0.292	-0.186	0.046	-0.045	0.512
清潔な-不潔な	0.580	0.046	-0.366	-0.083	0.045	0.481
やさしい-きびしい	0.469	0.022	0.198	0.060	-0.312	0.360
自由な-不自由な	0.564	-0.089	-0.484	-0.160	0.009	0.586
意欲的な-無気力な	0.177	0.756	-0.031	-0.072	0.087	0.616
実践的な-非実践的な	0.155	0.602	-0.168	-0.127	-0.031	0.432
多様な-一様な	0.086	0.601	-0.011	-0.182	-0.169	0.431
価値のある-価値のない	0.124	0.561	0.029	-0.092	-0.133	0.357
専門的な-非専門的な	-0.017	0.547	0.003	-0.141	-0.196	0.358
重要な-重要でない	-0.016	0.533	-0.251	0.180	-0.342	0.497
確実な-不確実な	0.319	0.530	-0.181	-0.274	-0.083	0.497
自立した-依存した	0.224	0.485	-0.170	-0.041	-0.032	0.317
積極的な-消極的な	0.150	0.536	-0.436	-0.078	0.200	0.546
安定した-不安定な	0.280	0.042	-0.629	-0.047	-0.195	0.516
おもしろい-つまらない	0.319	0.098	-0.596	-0.017	-0.236	0.522
進歩的な-保守的な	0.142	0.184	-0.524	-0.246	0.012	0.389
科学的な-非科学的な	-0.158	0.124	-0.163	-0.709	-0.127	0.585
研究的な-研究でない	0.061	0.302	-0.184	-0.541	0.182	0.455
創造的な-非創造的な	0.428	0.332	0.028	-0.487	-0.065	0.535
知的な-知的でない	0.406	0.312	0.117	-0.473	0.121	0.515
勤勉な-怠慢な	0.218	0.393	0.058	-0.418	-0.092	0.389
理論的な-理論でない	-0.113	0.010	-0.331	-0.549	-0.439	0.617
高尚な-低俗な	0.249	0.162	0.016	-0.233	-0.635	0.546
深い-浅い	-0.189	0.380	-0.179	-0.020	-0.577	0.545
慎重な-軽率な	0.142	0.397	-0.026	-0.215	-0.327	0.331
几帳面な-ずぼらな	0.028	0.361	-0.059	-0.259	-0.099	0.212
協調的な-非協調的な	0.240	0.378	-0.067	-0.314	-0.048	0.305
やりがいのある-やりがいのない	0.075	0.326	-0.393	0.147	0.006	0.288
理性的な-感情的な	-0.253	0.050	-0.377	-0.209	0.007	0.252
魅力的な-魅力のない	0.239	0.085	-0.096	0.086	-0.337	0.195
因子負荷量2乗和	5.305	4.561	2.509	2.452	1.784	16.611
寄与率 (%)	14.736	12.669	6.969	6.811	4.956	
累積寄与率 (%)	14.736	27.405	34.375	41.185	46.142	

な-消極的な」「多様な-一様な」で看護のあるべき姿の前向きさと関連していると考え、『本質性』と命名した。5因子の累積寄与率は、46.5%であった。

表3より、現実の看護婦イメージでは、f1『専門性』f4『就労状況』f5『本質性』は

肯定的イメージであったが、f2『人間性』f3『やりがい』については否定的イメージであった。

(3)理想と現実の学年別の看護婦イメージ
学年別の(表4の最上部に示す)比較では、理想の看護婦イメージのf3『就労状況』f4

表3 因子分析 (現実)

変数名	f 1 専門性	f 2 人間性	f 3 やりがい	f 4 就労状況	f 5 本質性	h^2
理論的-理論的でない	0.672	0.027	-0.141	0.180	0.021	0.505
研究的-研究的でない	0.656	-0.113	-0.134	-0.231	0.116	0.528
勤勉-怠慢	0.653	-0.161	-0.190	0.099	-0.200	0.538
科学的-非科学的な	0.605	-0.099	-0.019	0.065	0.269	0.453
創造的-非創造的	0.464	-0.218	-0.267	0.006	0.373	0.473
理性的-感情的	0.416	-0.066	-0.030	0.053	0.021	0.181
意欲的-無気力	0.512	-0.156	-0.473	0.195	0.176	0.579
知的-知的でない	0.435	-0.011	-0.432	0.194	0.035	0.415
実践的-非実践的	0.430	0.029	-0.408	-0.221	0.181	0.434
協調的-非協調的	0.533	-0.457	-0.149	0.142	0.036	0.536
やさしい-きびしい	-0.119	-0.740	-0.140	-0.167	0.201	0.649
温かい-冷たい	0.211	-0.662	-0.049	0.174	-0.079	0.522
穏やかな-激しい	-0.243	-0.659	-0.177	-0.161	0.035	0.552
軟らかい-硬い	0.034	-0.658	-0.043	0.184	0.192	0.506
親切的-不親切的	0.361	-0.642	-0.234	0.221	-0.288	0.730
明るい-暗い	0.330	-0.619	-0.151	0.311	-0.029	0.612
楽しい-苦しい	0.097	-0.607	0.151	0.173	0.280	0.508
親しみやすい-親しみにくい	0.172	-0.601	-0.203	0.324	-0.233	0.591
清潔な-不潔な	0.200	-0.419	0.046	-0.008	0.046	0.220
価値のある-価値のない	-0.140	-0.176	-0.664	0.141	-0.031	0.512
重要な-重要でない	0.045	-0.042	-0.659	0.369	-0.058	0.578
専門的-非専門的	0.279	-0.052	-0.600	-0.033	-0.027	0.443
慎重な-軽率な	0.217	-0.123	-0.581	-0.168	0.138	0.448
深い-浅い	0.224	-0.041	-0.544	0.040	0.029	0.350
確実な-不確実な	0.408	-0.326	-0.512	-0.059	0.070	0.543
多様な-単様な	0.144	-0.041	-0.497	0.114	0.461	0.494
自立した-依存した	0.352	0.034	-0.463	-0.120	0.342	0.471
おもしろい-つまらない	0.153	-0.278	-0.100	0.563	0.001	0.427
安定した-不安定な	0.128	-0.072	0.109	0.506	0.043	0.291
やりがいのある-やりがいのない	-0.107	-0.131	-0.281	0.476	0.131	0.351
進歩的-保守的	0.129	-0.133	-0.051	0.035	0.641	0.449
積極的-消極的	0.322	-0.178	-0.301	0.278	0.482	0.535
高尚な-低俗な	0.376	-0.022	-0.149	0.225	0.171	0.243
几帳面な-ずぼらな	0.385	-0.169	-0.328	-0.221	-0.335	0.446
魅力的な-魅力のない	0.024	-0.329	-0.250	0.215	-0.308	0.313
自由な-不自由な	0.303	-0.248	0.330	-0.228	0.084	0.321
因子負荷量2乗和	4.481	4.397	4.031	1.938	1.899	16.746
寄与率(%)	12.446	12.214	11.197	5.385	5.274	
累積寄与率(%)	12.446	24.660	35.857	41.242	46.516	

『専門性』と現実の看護婦イメージのf3『やりがい』で3年次生の方が1・2年次生よりも否定的イメージが低く、また現実の看護婦イメージにおいてもf1『専門性』で1年次生に比較してより肯定的にとらえていた。しかし、現実の看護婦イメージのf2『人間性』で

は、1年次生より否定的にイメージしていた。

4. 看護婦イメージに関する要因の分析

(1)各概念の因子得点と要因の関連性

理想と現実の看護婦イメージの因子分析で抽出された5因子の各因子得点とイメージに関連すると思われる要因(学生の背景:但し

表4 因子得点と要因の関連

要因	因子 比較群	理想					現実				
		f1人間性	f2やりがい	f3就労状況	f4専門性	f5本質性	f1専門性	f2人間性	f3やりがい	f4就労状況	f5本質性
学年	1-2年生間										
	1-3年生間			1>3***	1>3**		1>3**	1>3*	1>3***		
	2-3年生間			2>3***	2>3**				2>3***		
入学動機 看護婦	1-2年生間					1<2*		1<2*		1<2*	
	1-3年生間			1>3*	1>3**			1<3**	1<3**		
	2-3年生間			2>3***	2>3*				2<3**		
それ以外	1-2年生間										
	1-3年生間			1>3**			1<3*		1<3***		
	2-3年生間			2>3*	2>3**				2<3***		
将来の希望 看護婦	1-2年生間					1<2*					
	1-3年生間			1>3*	1>3**			1<3*	1<3***		
	2-3年生間			2>3*	2>3**				2<3***		
それ以外	1-2年生間										
	1-3年生間			1>3***			1<3**		1<3**		
	2-3年生間			2>3***	2>3*				2<3***		
両親の職業 医療関係者	1-2年生間									1<2*	
	1-3年生間				1>3*		1<3**		1<3**	1<3**	
	2-3年生間								2<3***		
それ以外	1-2年生間									1>2*	
	1-3年生間			1>3***			1<3*		1<3***	1>3**	
	2-3年生間			2>3***	2>3**				2<3***		
生活形態 一人暮らし	1-2年生間							1<2*			
	1-3年生間			1>3**			1<3**	1<3**	1<3***		
	2-3年生間			2>3***	2>3**				2<3***		
それ以外	1-2年生間										
	1-3年生間			1>3***					1<3*		
	2-3年生間								2<3**		
入院経験 あり	1-2年生間					1<2*					
	1-3年生間			1>3**	1>3**		1<3*	1<3*	1<3***		
	2-3年生間			2>3**	2>3*				2<3***		
なし	1-2年生間							1<2*			
	1-3年生間			1>3**							
	2-3年生間			2>3***	2>3**						
死別体験 あり	1-2年生間	1<2*									
	1-3年生間			1>3***	1>3**		1<3*	1<3*	1<3***		
	2-3年生間	3<2*		2>3**	2>3*				2<3***		
なし	1-2年生間										
	1-3年生間			1>3*			1<3*		1<3**		
	2-3年生間			2>3*	2>3*				2<3**		
一日体験 あり	1-2年生間					1<2*		1<2*			
	1-3年生間			1>3**			1<3**	1<3*	1<3***		
	2-3年生間			2>3***	2>3*		2<3*		2<3***		
なし	1-2年生間										
	1-3年生間			1>3**					1<3**		
	2-3年生間			2>3*	2>3*				2<3*		
就労継続期間 結婚出産まで	1-2年生間										
	1-3年生間			1>3*							
	2-3年生間			2>3*					2<3*		
できるだけ	1-2年生間										
	1-3年生間			1>3**	1>3**		1<3**		1<3***		
	2-3年生間			2>3***	2>3*				2<3***		

*** p < 0.001 ** p < 0.01 * p < 0.05

講義と実習の感想を除く)について学年別に対比較の結果を表4に示した。これより、全ての要因でいずれかの学年との因子得点の平均値の対比較で有意差がみられていた、5因子のうち有意差がみられなかったのは、理想のf2『やりがい』と現実のf5『本質性』であった。

表4全体を散見すると、以下のことが要約できる。

- 理想のf1『人間性』では、各学年とも死別体験が有る学生のうち、2年次生が1・3年次生と比較して有意に肯定的なイメージをもっていた。
- 理想のf3『就労状況』の否定的イメージでは、全ての要因で3年次生と1・2年次生との間に有意差が認められ、3年次生の方が1・2年次生に比較して就労状況についての否定的イメージが低かった。
- 理想のf4『専門性』の否定的イメージでも、全ての要因と有意差がみられ、3年次生は他学年に比し、否定的イメージが低かった。
- 理想のf5『本質性』の否定的イメージでは、

看護婦志向で、入院経験のある、一日看護婦体験をしている1・2年次生のうち、2年次生の方が1年次生よりも有意に否定的イメージが強かった。

- 現実のf1『専門性』では、全ての要因で有意差がみられ、3年次生は1年次生と比較して『専門性』を高くとらえていた。
- 現実のf2『人間性』の否定的イメージにおいては、就労継続期間を除く他の全ての要因と関連があり、1年次生は2・3年次生と比較して有意に否定的イメージが低かった。
- 現実のf3『やりがい』の否定的イメージでは、全ての要因で有意差がみられ、3年次生は1・2年次生と比較してより否定的にとらえていた。
- 現実のf4『就労状況』では、入学動機が看護婦である1・2年次生の比較で、1年次生の方が有意に低くとらえていた。また、両親の職業が医療関係である1年次生と2・3年次生では1年次生の方が有意に低くとらえ、両親の職業が医療関係以外の場合は逆に2・3年次生の方が有意に低かった。

表5 因子得点とSE得点とのピアソンの積率相関係数

理想

	学年 \ 因子	f1人間性	f2やりがい	f3就労状況	f4専門性	f5本質性
SE 得点	1年次生	-0.105	0.113	-0.259	-0.037	0.029
	2年次生	0.301*	0.095	-0.043	0.092	0.009
	3年次生	0.047	-0.056	0.022	0.061	0.062

現実

	学年 \ 因子	f1専門性	f2人間性	f3やりがい	f4就労状況	f5本質性
SE 得点	1年次生	-0.101	0.250	0.200*	-0.212	0.127
	2年次生	0.192	-0.031	-0.275*	0.141	0.234
	3年次生	-0.136	-0.029	0.064	0.100	0.904

* $P < 0.05$

(2)各概念の因子得点とSE得点の関連性

学年毎のSE得点と因子得点のピアソンの積率相関係数は、表5に示す通りで、理想の第1因子『人間性』で2年次生のSE得点と有意な正の相関がみられ、SE得点が高いほど理想の看護婦イメージの『人間性』のもつ傾向が強いことを示していた。

また、現実の否定的イメージであるf3『やりがい』で、1年次生のSE得点と正の相関が、2年次生のSE得点と負の相関がみられた。これより、現実のf3『やりがい』については、1年次生のSE得点が高いものほど否定的なイメージが強く、2年次生のSE得点が低いものほど否定的なイメージが強いことを示していた。

考察

1. 理想と現実の看護婦イメージについて

因子分析の結果、理想の看護婦イメージではf1『人間性』f2『やりがい』で肯定的イメージを、f3『就労状況』f4『専門性』f5『本質性』で肯定的イメージ、f2『人間性』f3『やりがい』で否定的イメージであった。

これらより、各概念とも同様の因子内容を示すと思われる5因子が抽出されたが、得られた因子の相対的順位は異なっており、また理想と現実の看護婦イメージで、肯定的イメージを表す因子と否定的なイメージを表す因子が相互に逆転しているなど、概念によって尺度の因子的意味が異なっていることが考えられた。そこで、得られた結果が互いに独立したものと考えてよいのかを再確認する意味で、理想と現実を込みにした因子分析（主因子解、6因子、直交回転、バリマックス法、絶対値0.40）を試みた。その結果、第1因子から第4因子まで理想と現実ではっきりと因子が分かれ、それぞれが群にまとまらなかつ

たため、互いに独立したものとして考察した。

本調査対象の理想の看護婦イメージは、f1『人間性』やf2『やりがい』で寄与率が最も高かったことから、理想とする看護婦は豊かな人間性をもちやりがいのある仕事をする人、と肯定的なイメージでとらえていることが推測された。しかし、否定的な感情を示すf3『就労状況』f4『専門性』f5『本質性』もみられ、理想の看護婦イメージは肯定的な側面のみでないことが考えられる。

f3～f5の因子は、教育側が様々な場面で適切な情報を提供することによって学生一人一人が看護における実情を把握した上で、本来どうあるべきかという思考の基に追究していく内容であり、まだ学生の中で十分に熟知されていないことが考えられる。この点については、学年別の比較で、f3『就労状況』f4『専門性』において、3年次生の方が1・2年次生よりも否定的なイメージが減少していることから、これらは講義で学んだことを実体験を通して深めていく内容であることも考えられ、今後3年次生が卒業に至るまでの過程で、どのように変化していくかを知り、その上で講義内容や方略などについて検討していくことの必要性が示唆された。

現実の看護婦イメージでは、f1『専門性』で最も寄与率が高く、次いで否定的イメージであるf2『人間性』f3『やりがい』であった。このことより、現実の看護婦は専門的ではあるが、人間的にきびしくやりがいのある仕事をしているとはいえない人、と否定的なイメージを感じていることが推測された。学年別比較でも、3年次生は1年次生よりもf1『専門性』は肯定的にとらえているが、f2『人間性』については否定的にとらえるなど、看護の基盤となる人間に対するイメージが後退している点で教育上よく吟味しなければなら

ないことを示唆していると思われる。

エリクソン¹⁵⁾は「自己の identity について確信が持てない青年は人間関係の親密さから尻込みしてしまう」と述べている。また、一般に、学生は周囲の人から受け入れられて、学生自身が信頼できる存在であると感じられたとき、自分を確立できるといわれており¹⁶⁾、青年期にある学生を教育する立場にある我々は、学生の identity 確立にもっと緻密な対応をする必要があることが推察される。このことについては、本研究の調査期日が、特に3年次生は各論実習に移行したばかりで、学習不安が強い時期であったことも影響していることが考えられるので、学習段階における新しい状況に対するオリエンテーションや心理的サポートなど、学生の適応を援助する関わり方についても検討する必要があると思われる。また、学生は教師や病院看護婦を役割モデルとして看護の学習を深めていくことが少なくないので、各学年に対する教師の対応のあり方や、臨床との実習指導に関する話し合いも再度検討の余地があることが示唆された。

2. 看護婦イメージに関連する要因について

因子得点の要因の項目別学年比較の結果から、各概念にかかわらず3年次生と他の学年間にイメージの大きな相違がみられた。理想ではf3『就労状況』f4『専門性』の否定的イメージで、3年次生は1・2年次生に比較してより肯定的にとらえており、現実でも1年次生に比較してf1『専門性』のイメージが高かった。しかし、現実の看護婦イメージのf3『やりがい』の否定的イメージでは、1・2年次生と比較してより否定的なイメージをもっており、f2『人間性』でも、看護婦志望の学生で、親の職業が医療と関係のない一人暮らしの、入院・死別・1日看護婦体験の

ある3年次生の場合は、1年次生よりも否定的なイメージをもっていた。

3年次生と1・2年次生が異なる点としては基礎実習の有無が影響していることが考えられるが、実習では就労状況や看護の専門性のイメージが改善される反面、やりがいなど今までのイメージが後退することもあり、学生を指導する状況を評価し、この原因として何が考えられるかをもう少し詳細に検討することが必要である。

また、入学以前に看護状況を何らかの形で体験している看護婦志望の3年次生が、人間性について否定的なイメージをもっているということは、入学前と現在の看護婦イメージについて価値の転換が起きていることが考えられる。これは看護婦志望の1日看護婦体験のある2年次生の場合にも当てはまると思われる。高校生が医療系の進路を選択する場合、病気や死、看護婦体験などによって援助されたり援助することを通して、人のためになりたいという人と人のつながりを基盤にして決定することが少なくない。看護は人間と人間の相互作用によって成立する職業であり、教養を深め、自分の人間性を幅広く高めていくことは必須の課題である。したがって、この点に関しては、我々教師はもう一度十分に検討する必要がある。人間性に対する否定的イメージは、学生の理想と現実のギャップが大きいことも考えられるので、志望動機などもう少し詳細に把握すること、学生の思いを傾聴することなどの必要があると考えられる。

看護婦のイメージに関する要因の一つであるSE得点は、40点満点で青年期では25点が平均的であり、目安として30点以上は高く、20点以下は低いとされている。本調査対象は平均を僅かに下回るが、t検定で有意に低い

とはいえ、 $(P < 0.001)$ SE 得点は標準的ととらえてよいであろう。

表5の結果から、2年次生では、SE 得点が高いほど理想の人間性について高く評価し、SE 得点が低いものほど現実の看護婦イメージとしてやりがいがないと感じていた。このことより、不安傾向が少ない人ほど人間性に対する理想が高く、逆に不安傾向にある人は看護に失望している様相が考えられ、日頃の授業態度や行動パターンなども合わせて、SE 得点について検討していくことの必要性が示唆された。

1年次生では、SE 得点が高いものほど現実のイメージでやりがいがないとしていることなどから、看護婦志向性や講義の感想などについて情報収集して検討していく必要性があると思われる。

まとめ

本学看護短大生が専門教育を受けるプロセスの中で、どのように看護婦イメージを変化させているのかを明らかにするために、理想と現実の看護婦イメージとその要因について学年別に比較検討し、以下の結果を得た。

1. 因子分析の結果、理想の看護婦イメージでは、f1『人間性』f2『やりがい』で肯定的イメージを、f3『就労状況』f4『専門性』f5『本質性』で否定的イメージを有していた。現実の看護婦イメージでは、f1『専門性』f4『就労状況』f5『本質性』で肯定的イメージ、f2『人間性』f3『やりがい』で否定的イメージであった。

2. 理想と現実の看護婦イメージの因子分析で抽出された5因子の各因子得点とイメージに関連すると思われる要因について学年別の対比較をした結果、全ての要因でいずれかの学年と有意差がみられていた。

今後はこれらのイメージが学年の進行に応じてどのように変化していくのか、また要因と思われる項目について掘り下げて追跡調査し、教育に反映させていく予定である。

謝 辞

本研究を実施するにあたり、調査に快く協力して下さった学生の皆様に心よりお礼申し上げます。また、本論文作成に際しご指導くださいました方々に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 東 洋他：心理用語の基礎知識。有斐閣ブックス，522，1987。
- 2) ボウルディング.K.E.，大川信明：ザ・イメージ。誠信書房，4，1979。
- 3) 真鍋淳子他：看護学生の看護婦イメージの研究 大学生と短大生の比較。看護教育，35(6)，427-433，1994。
- 4) 佐藤和子他：短大生の意識調査(第2報) ー看護婦イメージに関する検討ー。聖マリア医学，15(2)，226-227，1988。
- 5) 前掲書4)。
- 6) 石鍋百合子他：看護婦イメージの研究。看護教育，23(7)，446-453，1982。
- 7) 前掲書3)。
- 8) 三上れつ他：看護学生の看護婦イメージに関する要因の分析(1)ー看護教育課程別・新入生の比較ー。応用心理学会第62回大会発表論文集，80，1995。
- 9) 謝花美佐子他：看護学生の看護婦イメージの学年別の検討(動機と意志の関連性)。看護教育，89-94，1984。
- 10) 前掲書3)。
- 11) 前掲書3)。
- 12) 長田万里他：看護学生の看護婦イメージに関する研究ー理想像・現実像についてー。信州大学医療技術短期大学部看護学科研究論文集平成6年度，169-176，1994。
- 13) 管佐和子：SE (Self Esteem) について。看

護研究, 17(2), 21-27, 1984.

14) Osgood, C. E., Suci, G. J., & Tannenbaum, P. H.: The measurement of meaning, Urbana, University of Illinois Press, 1957.

15) エリクソン, 小此木啓吾訳: 自我同一性. 誠信書房, 1973.

16) 岡本祐子・松下知子編: 女性のためのライフサイクル心理学, 福村出版, 1994.

受付日: 1995年10月3日

受理日: 1995年11月21日